

大学における学生教育のフロンティア

照屋 行雄

<プロローグ>

今日ほど大学における学生教育の点検と改善が求められている時代はない。

教育事業を推進する大学側にあっては、常に時代の進展に対応した適切な教育プログラムを用意し、組織的な教育体系を構築することが求められる。また、実際の教育に従事する教師においては、これまでの研究と経験を基礎に、創意と工夫を加えた効果的な教育実践を遂行することが求められる。

一方、大学で学ぶ学生諸君においても、高等学校までに獲得した知識や形成した能力を基礎に、自己の学修目標と学修計画を設定し、意欲的・積極的に勉学に励む努力が強く求められる。

本稿では、教育現場からのレポートとして、2つのテーマを取り上げた。1つは、レポートの添削・返却に関する教師から教師への呼びかけであり、2つは、知的学生生活の確立に関する教師から学生諸君へのメッセージである。

<第一話>教師から教師へ—レポートの添削・返却

レポートのゆくえ

どこの大学でも学生へのレポート提出という課題は、多くの教師が種々の目的のために課しているようである。特に成績評価を行う目的のためにとられる例が多いように思われる。私の大学時代でもかなり多量のレポートを作成し、提出した記憶がある。各大学で現在、学生一人当たり平均で年間にどれだけのレポート提出が、学生諸君に課せられているのか詳しくは知らない。しかし、臨時試験や学期末試験のシーズンとなると、レポート作成で多くの学生が多忙となることは容易に想像される。

ところで、これほど多量に作成される学生のレポートが、提出された後、どのような運命をたどるかについて、私はたえず心配をし続けてきている。実は殆どのレポートが、教師側の当初の成績評価目的の達成と同時に事実上の死を迎えているのではないかとひどく恐れているのである。私のこのような不安は、若い講師の時代におけるある学生についての発見によって形成され、今ではかなり肥大してきている。

ある学年度の秋、担当科目の一つについて臨時試験の代りに幾つかの課題を指示して、400字詰原稿用紙で10枚程度のレポートの提出を課したことがあった。期限を遅れて提出する学生が少なくなかった中であって、講義への出席状況のよい一人の男子学生（4年生）が、なんと期限のはるか2週間前にレポートを提出したのである。滅多にお目にかかれない快挙であるだけに、受け取って研究室に戻り、机の上に取り出して読むまで、はやる心を抑えるのに苦労したものである。

ところが、いい知れぬ喜びと期待にうち震えていた心が、恐ろしい落胆と憂うつな灰色に支配されたのは、読みはじめてからわずか15行も進まぬうちであった。内容が貧弱であったからではない。原稿用紙の升目を埋めているのは、およそ大学生の文章といえるものではなく、まさしく文字の幼稚な積木であったからである。誤字・脱字が堂々と恥じることなく随所に顔を出したり、句読点のつけ方が無法則であったり、主語がなかったり、文章がどこまでいっても終わらないなどレポート全体が欠陥だらけであった。どうにか主題に関連するものを書こうとはしているが、文章そのものとしては中学の上級生の良質の作文にも及ばないものであった。求められているのは、ある主題についての論理的な究明過程とその論述であるのに、それ以前の作文力がこれほどおそまつでは、大学における知的営みとしては「話にならない」わけである。

私の心は、その時、この学生の側に文章を書く訓練が日常的に行われていないことを責めたり、あるいはもっと一般的に、現在の学生諸君が文章を書かなくても大学生活をエンジョイできるような環境におかれていることを嘆いたりすることだけではおさまらなかつた。これらはしばらく学生とつき合ってみればすぐに理解できることだからである。私がこのことに接して驚愕したのは、このような学生がそのまま何の指導もなされず4年の間放置されていた事実そのものであった。

読者の中には、とくに教師の多くが、この学生のような事例は全体からすれば少数に属すると思われるかも知れないが、実際には、彼が向学心に燃える学生であることは私の半年間の観察によって確認できたのである。私は、ここにあげた事例は

決して特定の少数の学生だけの問題ではなく、作文力の問題としてのみならず、同時にレポートの作成技術まで考えるならば、率直に言って大なり小なり多くの学生についていえるのではないかと思っている。もっとも、正確な文章を書くということはそうたやすいことではないことはよく承知している。

教師の怠慢

ここで私が問題にしたいのは、学生にとって、少くとも基礎的段階において最も重要なレポート作成の技術および作文力の指導の絶好の機会でもあるレポート提出が、その目的のためには殆ど活用されていないのではないかという点である。しかも、それは殆どの場合、教師の怠慢によるところが大きいのではないかということである。

私は、先の学生を翌日呼んで、文章それ自体がなっていないことを指摘するとともに、レポートの作成方法について詳細に指導し、やり直しを命じた。私は、担当教員の高い評価を期待して出した自信作が、一日にしてみるも無惨な姿で返却されたことにより、この学生は再びペンをとる勇気があるだろうか、ある種の不安を抱いて反応を待った。2、3日して会った時、この学生は、落胆どころか大変に感激したと語ってくれた。まず第1に、4年間の大学生活ではじめてレポートの返却を受けたことを喜び、第2に、自分の文章の一字一句がはじめて教師の手によってチェックされたのを目の前にして感激したとのことであった。そして、彼は卒業を数カ月に控えて、始めて自分の文章のどこが悪いのかを知ったという。彼は、最終的には最初のものに比べればはるかに良いレポートを提出して学園を去っていった。現在は社会の責任ある一員として頑張っていると信じているが、しかし、レポートを作成したり、文章を書いたりしなければならない時（その機会は、彼が重要な地位を占めるようになれば、それに比例して多くなるのが一般的である）は、きっと取得した単位の評価のことよりもはるかに強く、大学の4年間に作文の訓練やレポート作成の技術を修得する機会が殆どなかったことを嘆いている様子が鮮明に想像されるのである。私はそのことを思う時、教師の一人として責任の一端を感じて今でも心が憂うつになるのである。

総じて、今の大学生は、提出したレポートは再び手元に戻って相まみえることはないものだと、殆ど自らの経験によって思い込んでいるようである。4年の間に一度も返却されたことがないのであれば学生がそう思い込むのも無理はないと思う。学生からの返却要求がないことを無気力と責めることなど決してできない。むしろ、

教師の怠慢として非難されても弁解の余地はないものと覚悟を決めるべきであろう。

レポートは、教師にとって、多くの場合単なる評価の対象でしかなく、成績報告書の作成が完了したあとの行方など全く無関心の人が多いのではないかと推察される。少数の例外を除いて殆どが無雑作に茶色封筒につめ込まれ、研究室か自宅の書斎の片隅に永久に死蔵されるケースが多いと思われる。もっとも、成績評価のためにどれだけ真剣に個々のレポートをチェックしたのかということさえ疑わしく、常に後味の悪い思いを経験している教師もかなりいると思っている。

これに対して、多くの向学心に富む学生にとっては、提出したレポートは内容の貧弱さにもかかわらず、自己の思考と時間を投入してまとめあげた、若き時代における数少ない立派な知的生産物である。しかも、それがより価値の高い次の知的生産物を生むためには、教師が文章および内容についてチェックし、論評を加え、それが本人の手元に戻されなければならない。もちろん、本人がそれを次の作業のための基礎として活用しなければそれ以上の効果は期待できないのであるが、教師からのレポートの返却は本人の自己啓発を誘導する重要な契機となり得ることは明白である。

もっとも、現在の学生の提出するレポートを立派な知的生産物とみることに對して、多くの教師が自らの経験によって躊躇するであろう。なぜなら、2, 3の参考書の中から、あるいは最近ではインターネットから関連する箇所を抜き出し、それを継ぎはぎしてできあがった部分がかかなり多いからである。確かに継ぎはぎ的レポートは、その段階にとどまる限りにおいてはそれほどの効果は期待できない。しかし、将来、立派なレポートや論文が書けるようになるための努力につながる出発点としては重大な意味をもつ。黒板を前にして座る立場から、今では黒板を背にして立つ立場に変わった教師の多くが、レポート作成の当初は、ある主題について書かれた参考書の中から関連する箇所を引用して、それらを一つの筋の通ったものに組み立てて仕上げていくということから作業を始めたのである。要は、この作業の次に自分のまとめようとしている領域では何を問題にし、何を問題にしないのか、また、何が解決されており、何が解決されていないのか、ということをつたえず把握するように努めることである。このような営みの蒸留から、自然に獨創性が生まれ、やがて立派な知的生産物となって行くのである。このような意味で、大学時代に、特に初期の段階で作成するレポートが、たとえその作成方法や内容に獨創性が乏しいが故にレポートそのものの出来が貧弱となっているとしても、私は学生諸君にその努

力と成果は大事にしないでと言いつつ続けている。

レポート返却

私は、自分の作成したレポートの行方などどうでもよいと考えている学生の将来は、決して実り多いものとはならないことを忠告している。それにもかかわらず、現在の学生の多くが、自分の作成したレポートに無関心であるという状況がみられる。その理由の本源的なものは、それに対して誇りを感じていないためであると思われる。つまり、自らの手になるレポートを立派な知的生産物として学生自身が目覚していないということである。誇りを感じていないからこそ作成の意義を理解せず、ただ出せばよいとの思いに終始するのであろう。そして、その誇りを感じさせていない現状は、学生をして、提出したレポートは二度と手元に帰ってこないと思込ませている現在の大学教育のあり方から生まれたものと言っても過言ではあるまい。学ぶことを本来の業とすべき学生が、怠惰やマージャンや酒色をより楽しむ楽生にならないためにも、彼らに自己の知的生産に誇りを持たすことは重要なことといえる。自分が作成するレポートに対して誇りと愛情を抱かせるためには、提出されたレポートにできるだけ詳細に論評を加えて、学生の手元に返却することが強く求められる。

私は、教師によって詳細に赤ペンで添削され、返却されたレポートほど学生にとって貴重な財産はないと思っている。私はまた、そのことのわかる、つまり、そこに大なる主観的価値を見い出せる学生をより多く育てることが教師の重要な仕事の一つだとも思っている。

私が、以上において、教師が学生に課しているレポートに関連して、その有効な活用を、とくに教師の側に向って提言したのは、これほど多量に提出されるレポートが、単に教師の成績評価のためにのみ使われ、学生のレポート作成技術の修得並びに基礎学力としての作文力の養成のためには殆ど活用されていない現状を憂えるからである。もちろん、レポートの添削、返却の作業は、教師にとっては大変な作業である。特に受講生の多いクラスの担任にとっては、この提言は、腹立たしい限りに違いない。しかし、よく考えてみれば大学が学生を各種の方法で受け入れるということは、入学後の教育にそれ相応の努力をばらうという決意と自信の表明ではないだろうか。そうであるとすれば、学生に対するレポートの返却（ここで言っているのは、教師が誠意をもって添削したもの）という作業はそれ程難儀なことではないはずである。全教員が多忙な研究・教育活動の中で、レポートの回収一論

評・添削—返却という作業を通じて、現在の大学教育の直面している一つの重要な問題の改善のために、勇気ある決意をもって取り組んでいくことを願っている。もとより、私はこの紙面に、今後も引き続き可能な限りの努力をしていく新たな決意を披露しているつもりである。

＜第二話＞教師から学生へ—知的学生生活の確立

学生の証明

学生諸君がすでに体験しているように、大学生活は高校生活に比べて時間的には大変ゆとりがある。大学に入ると同時に、朝から午後3時頃まで出席を強制される授業がビッシリ詰まって、身動きもできない状況にあった高校時代までの生活から解放される。

受講科目数も少ないし、出席も強制されない。夏、春の休暇も長期間与えられる。一方では、学生としての一定の社会的身分が保障され、多くの場合に一個の人格として尊重されることになる。試験やレポートさえなければこれほど楽しいところはないと思っている学生は多いであろう。もちろん、エンジョイすることは大変結構である。諸君は大学生活のみならず人生そのものを大いにエンジョイすべきである。しかし、エンジョイの仕方には、自らのおかれた状況に相応した一定の原則が認識されなければならない。学生には“学生であることの証明”が日常的に要求されるわけである。

はっきり言えば、学ぶ意欲のない学生は大学にとどまる理由はないということである。大学というところは、ある程度の基礎学力をもち、かつ、学問研究の意欲をもつものだけが行くところである。従って、基礎学力がないかあるいは大学の4年間を通じて補強できる見通しが立たない人や、学ぶ意欲のない人は大学にいる資格はないといってよいであろう。とくに、勉学意欲のない人はいさぎよく大学を離れて、社会人として自らの人生を切り開いていった方が、本人のためにも大学にとっても望ましいとさえ思う。このように、大学は学生の自発性が最も要求される場所である。従って、そこにおける教育の本質は、学生が自分で考え、自分で学ぶ力を養うために講義やゼミナール等を通じて間断なき知的刺激を与えることにある。

ところで、現状は大学に入学した者のほぼ4割が勉学意欲があるのかどうか疑わしい状況である。現在、私の講義（会計学原理）に常時出席しているのは登録人員の5～6割（150人）程度である。他のクラスも大体そういう状況のようである。これは必ずしも私のクラスのみではなく現代の学生一般についていえるように思わ

れる。講義に出席しない残りの5～4割の学生（もっとも、試験当日のみは満員御礼の大盛況である）は、その間、一体何をして過ごしているのか全く想像できない。よもやアルバイトを本業としているわけでもあるまい。もちろん、講義へ出席していればそれでよいというものではないが、基本的には広い意味での教養を身につけ、専門課程での研究テーマ（あるいは関心領域）をもてるようになるためには、毎日の講義にきちんと自らの意思で出席し、教師の講義をまじめに聞くとする日常の態度が大切である。

学生諸君には、絶えず自らに、「何のために大学に通っているのか」、「学ぶ意欲があるのか」を厳しく問い、反省と発奮の平行な心の作用をまず育てあげて欲しいと思う。

サークル活動への参加

ところで、学生生活を有意義に過ごす上でサークル活動への参加は確かに重要である。文化系にしる体育系にしる、所属するサークルの活動に積極的に参加することによって、講義で学習することのできない領域の研究がグループで行えたとともに、各面の人間修練（とくに協調性や指導性に富んだ人間の形成）が期待でき、かつ、友情がはぐくまれていくからである。このように、サークル活動は学生生活の一方の核であり、従って、サークル活動に多くの時間を配分することは容易にうなづけるわけである。最近では、サークル活動に参加しない学生が増えているようである。参加していない学生にとっては、参加学生に比べて多くの重要なものを得る機会を自ら放棄していることは間違いない。できるだけ多くの学生がサークル活動に積極的に参加して、学生生活を実り豊かに、かつ、エンジョイして欲しいと思う。

しかしながら、学生の本分は学問をすることにあるので、正規の時間または時間外での“学習”が主たる活動でなければならないことは強調され過ぎることはない。もし、サークル活動に意欲的に取り組んでいる学生の中に、学生生活についてサークル活動を主とし、学問研究を従とするような本末転倒な考え方があるとするならば早急に改める必要がある。かつて私の尊敬する教授が、「クラブ活動を重視する学生が開きなあって、“学問だけが能ではない”と言ってはばからないなら、逆に、学問すら身につけない懦弱な人間にそんなセリフを吐く資格なんぞないといいたい」と述べ、そのような学生の考えを厳しく戒められた。全く同感である。また、甲子園で史上3度の春夏連続優勝をとげ、監督就任以来合計6回の甲子園出場を果

たした和歌山箕島高校の尾藤監督の野球部員に対する指導の基本は、学業をおろそかにするなということであったという。「2」以下の成績しか残せなかった生徒は部活を停止したという話である。そのことは大学におけるサークル活動についてもそのまま当てはまるように思う。このような逆さまな意識のもとにサークル活動に熱心である学生は、心を入れ替えてもらわねばならない。

一方、勉学の意欲がかなり高く、かつ、サークル活動や自治会活動等の運営にかなりの時間を割いている学生が常に心すべきことは、そのことに埋没してしまって学習する時間をもたなかったなどのために、学習する際の知的緊張感に耐える力をスポイルされたりすることがないようにすることである。このことは意外にわかっていない学生が多い。とかく組織のリーダーをやっていると、活動を活発にしようと望むだけそれについての技術や喜びが増大して、つい時の大河に流されてしまうものである。意欲的にやっただけ種々の面で成長することは事実だが、その間、机に向うことを忘れているうちに最も大事な“学ぶ姿勢”を喪失することになりかねないのである。

私は若い頃、文化系サークルの商学研究クラブの顧問を引き受けた経験があるが、同クラブのリーダー諸君と接していて感じたことは、彼らのクラブ運営の業務と勉学との両立の問題である。同クラブの活動内容は商学研究（とくに簿記、会計学について、技能検定試験を学習上の手段として有効に活用して学習している）であり、その限りにおいては勉学との両立の問題はそれほど大きくはないといえよう。ただ、どの組織でもそうであるが、活動内容の企画、実践、総括に付随する研究以外の諸作業が、リーダーにとってはかなりの負担であることは間違いない。それは、教師が研究のみに没頭するだけでは充分でなく、教育にも当然に多くの時間を割かなければならないと同時に、大学運営にも熱心でなければならず、しかもこの3者は容易にバランスしがたい実状にあることと本質的にはかわらない。

クラブ活動と勉学が両立できずに苦悶している状態に関して、彼らから時々相談を持ちかけられたことがあった。関わっている以上、いずれについてもより完全に推進すべく、意欲的にならざるを得ないのが知的人間一般の特性である。彼らの多くが、積極的にサークル活動に関わっている過程で、ふとこれでよいのかという、あの何ともたえようのない寂寥感におそわれる時が少なからずあると思われる。とくに、水準の高い資格試験や学問研究を目指そうとしている者にとって、この苦悶は、日々心中秘かにくすぶっているという程度のものではなく、時にはサークル活動そのものから完全に身を退きたい衝動にかられるほど激しいものがあると想像

される。

私が彼らにアドバイスできることは、第1に、サークル活動から離れることは、一時的には自分の時間をこれまで以上に多く持つことができプラスのように思えるが、結局は“機会原価”が大きいこと、第2に、これが最も重要なことだが、サークル活動に多忙となる時ほど強く感じるあの寂寥感をこそ最も大事にすべきであること、の2点である。確かに知的に成長していく学生を観察していると、一方でサークル活動から逃げ出さず、他方で心の中では自己の学習の進捗を測定しつつ、時に両立の問題で悶々とした日を送っているようである。この問題は、あの寂寥感を大事にしつつ、本人の“知的闘い”の経験によって解決していかなければならない性質のものであるように思われる。

知的学生生活のすすめ

いまから30年前は、私も教壇に向って教師の話の聞いたり、ノートをとったりしていた。私の学生時代と現在の学生とではどこがどう違うのか、いましきりに学生諸君とのつきあいの中で観察しているところである。私生活にわたって知る機会がない上、自分の立場が当時とガラリと変わったので、現在の学生が毎日何を考え、何をして過ごしているのか想像が困難である。私の体験した、あるいは考えている学生生活というものがある程度現在の学生諸君に参考になるかわからない。しかし、30年という時の経過を蒸留してみても、結局何が一番よかったのかを考えてみれば、時代を超えて共通して言えるものがあるように思う。

人にはそれぞれ、その人のおかれた状況に応じた生活態度というものがある。父親には父親らしい言動が、学生には学生にふさわしい日常生活が、また、教師には教師にふさわしい水準の生活態度が要求されるのである。とくに、われわれ教師は、教育者として、かつ、研究者として社会的に重要な仕事をまかされており、われわれの社会に対する態度や指導のあり方が多くの人々に多大な影響を及ぼすものであるため、仕事としての講義に真面目になるだけでなく、日々の生活態度それ自体が相応の水準に維持されていなければならない。社会的には立派な教育者あるいは指導者とみなされている人が、自分の子供の教育に失敗した例は身近によく聞く話である。それは、結局は、その人の家庭における日常生活が、社会での立派な仕事ぶりに相応しくない態度であり続けていくところに根本原因があるように思われる。たとえば、子供には本を読めとか、勉強しろと言うのに自分はテレビをみたり、酒を飲んだり、遊びに出たりの毎日では、いかに外で立派なことをやったとしても、

少なくともそれを見ている家庭人の教育などできようはずがない。日常生活に嘘があってはいけないのである。

言うまでもなく、学生の仕事は勉学にはげむことである。もちろん、学生のおかれた今日的状況については十分承知しているつもりである。否、むしろ学生諸君以上に理解しているつもりである。それでもなお、私は一日のうちの利用可能な時間の常に最大量を、本とペンとのつき合いに費やすのが学生の仕事であることを強調したいのである。こんな自明のことを今さら強調しなければならないほど、学生諸君の自覚が薄れている現状にある。われわれ教師は自らの態度を厳しく律しつつ、教育内容の改善のためにあらゆる努力をはらう決意を日々新たにしていることは信じてよいと思う。多くの教師から、毎日の講義出席を義務づけるべきであるとする意見を聞くことが少なくない。本来、大学は、「強制して大学に出て来いとか、講義を強制的に受けさせるとか、そういうことは一切しない」ところであるにもかかわらず、出席を義務づけるべきとする意見の多い点については、学生諸君は十分肝に銘じて欲しいと思う。

さて、私の目から見た学生生活の望ましいあり方はどのようなものかといえば、一言でいえば、本やペンや机をその最も重要な交渉相手とする生活スタイルの確立を目指すということになる。つまり、本を読んだり、文章やレポートを書いたりすることにヨリ多くの時間を費し、しかも、そこにヨリ大きな喜びを感じるような生活スタイルの確立こそ、4年間の学生生活の中で修得しなければならない最重要事である。そのような生活スタイルを確立する作業の完成は、若ければ若いうちほどよいからである。

大学に入れば、現代社会をヨリよく生きる上で必要な教養を身につけるために、実に多くのことを学修する。自分の関心を引く学問領域もあれば、全く関心がないのに学ばなければならない領域もある。4年という限られた期間で、これだけのことを完全に修得することはどだい無理な話である。大学のもつ本質的な役割は、一生一人で学び続けていけるだけの基礎学力と、学び続けていけるための生活スタイルを身につけさせることである、と私は思っている。とくに、後者の場合、日常生活のあり方それ自体が、それに相応しいスタイルになっていなければならないのである。社会人になってからも絶えず、本を読まなければならない、読みたいと思いつつもつい多忙なために結局1ヶ月も半年も、さらには1年間も机に向うことをしなければ、常に心は悶々とした状態から抜け出せないのである。学生時代はガムシヤラに勉学に励んだ者が、卒業後社会人となってからはパツタリ本を買わなくなっ

たり、本を全く読まなくなったりする例は私の周囲にもゴロゴロころがっている。そうなった最大の理由は、学生時代の勉学が単位取得や就職試験のための期限付学習に終始したために、日常的に好きな本を読んだり、意欲的に専門書を読解したりする、自発的勉学を基礎とした生活スタイルが確立していないことにあると思われる。

先に強調したように、学生は学習することが仕事であって、そのことを自覚して4年間を意欲的に取り組むことによって、私のいう知的生活スタイルが形成され、定着していくのである。そのためには講義に出てきた時のみ本を開き、文字を書くという態度ではどうしようもないのである。大学での講義時間のみを勉強し、普段はテレビやマンガばかりみる生活では一般の社会人と全く変らない。そんなことでは、あえて大学にきた意味がないことになる。もし勉強する気力がなければこの4年間を別の人生に振り向け、専門技術の修得や一定の人的ネットワークの組織化を行なった方が賢明である。

学生諸君には、家庭でのプライベートな生活の中でも、友達との交渉の中でも、つまり時と場所を選ばず、常に“学生”であることが要求されている。4年間にそのような知的生活スタイルを作り上げていけば、卒業後就職についても、あるいは家庭人となっても、読む楽しさや、学ぶ喜びを自分のものとして豊かな人生を送ることができるわけである。

<エピローグ>

現代は一般に映像文化の社会、あるいはフィーリングの社会といわれ、しかもその傾向はますます強まる状況になる。映像やフィーリングによる文化の理解や意思の伝達は、われわれをして安逸な方向に流れさせる危険をはらんでいる。フィーリングに生き、安逸は方向に流れる生活スタイルからは、論理的思考や緊張感を伴う知的生産は期待できないといってよい。学生諸君を取り巻く今日的情況がこのようなフィーリングの社会だからこそ、逆に、学生に対して可能な限り文章を多く読ませ、レポートを書かせ、論理的な思考の訓練を行なわしめることが教育現場に要請されているものと考えられる。

学生諸君には4年間の学生生活の間に、自己の“知的闘い”の経験を基礎に、自分に最も適した知的生活スタイルを確立して欲しいと思う。学生諸君の中に、もしそういう生活スタイルが出来あがっている者がいれば、たとえ、たまたまテストの成績が悪い科目があったとしても、これは決して失意に当たらないことを自信をも

って表明したい。

(注) このレポートの中で示された教師および学生の教育実態に関する内容は、必ずしも筆者が現在所属する神奈川大学経営学部での個別的・具体的事実や事例を指すものではなく、筆者のこれまでの長年にわたる教育実践の過程で体験し、確信したことに基づいていることを断っておきたい。